

橋の下

フレデリック・ブウテ Frederic Boutet

森鷗外訳

青空文庫

一本腕は橋の下に来て、まず体に一面に食つ附いた雪を振り落した。川の岸が、流けがされたことのない処女の純潔に譬たとえてもいのように、真つ白くなっているの、橋の穹きゆう窿うりゆうの下は一層暗く見えた。しかしほどなく目が闇に馴れた。数日前から夜ごとに来て寝る穴が、幸にまだ誰たれにも手を附けられずにいると云うことが、ただ一目見て分かった。古い車台を天井にして、大きい導管二つを左右の壁にした穴である。

雪を振り落してから、一本腕はぼろぼろになった上着と、だぶだぶして体に合わない胴着との控鈕ボタンをはずした。その下には襦じゆ袢ばんの代りに、よごれたトリコオのジャケットを着込んでゐる。控鈕をはずしてから、一本腕は今一本の腕を露した。この男は自分の目的を遂げるために必要な時だけ、一本腕になつてゐるのである。さて露した腕を、それまでぶらりと垂れていた片袖に通して、一方の導管に腰を掛けた。そして隠しからパンを一切と、腸詰を一塊と、古い薬瓶に入れた葡萄酒とを取出して、晩食をしはじめた。

この時自分のゐる所から余り遠くない所に、鈍い、鼾いびきのような声が出したので、一本腕は頭をその方角に振り向けた。

「おや。なんだ。爺じいさん。そいつあいけねえぜ。」一本腕が、口に一ぱい物を頬張りな

がら云った。

一言の返事もせずに、地びたから身を起したのは、痩せ衰えた爺いさんである。白い鬚ひげがよごれている。頭巾の附いた、鼠色の外套の長いのをはおっているが、それが穴だらけになっている。爺いさんはパンと腸詰とを、物欲しげにじっと見ている。

一本腕は何一つ分けてやろうともせずに、口の中の物をゆっくり丁寧かに嚙かんでいる。

爺いさんは穹窿の下を、二三步出口まで歩いて行って、じつと外を見ている。雪は絶間なく渦を巻いて地の上と水の上とに落ちる。その落ちるのが余り密こまかなので、遠い所の街灯の火が蔽おほわれて見えない。

爺いさんが背後うしろを振り返った時には、一本腕はもう晩食をしまっていた。一本腕はナイフと瓶とを隠しにしまった。そしてやつと人づきあいのいい人間になった。「なんと云う天気だい。たまらないなあ。」

爺いさんは黙って少し離れた所に腰を掛けた。

一本腕が語り続けた。「糞くそ。冬になりやあ、こんな天気になるのは知れているのだ。出掛けさえしなけりやあいいのだ。おれの靴は水が染みて海綿のようになってけつかる。」
こう言い掛けて相手を見た。

爺いさんは膝の上に手を組んで、その上に頭を低く垂れている。

一本腕はさらに語り続けた。「いやはや。まるで貧乏神そっくりと云う風をしているなあ。きようは貰いがなかったのかい。おれだつておめえと同じ事だ。まずい商売だよ。競争者が多過ぎるのだ。お得意の方で、もう追つ附かなくなっている。おれなんぞはいろんな事をやってみた。恥かしくて人に手を出すことの出来ない奴の真似をして、上等の料理屋や旨い^{うま}物店の硝子^{ガラス}窓の外に立っていたこともある。駄目だ。中にいる奴は、そんな事には構わねえ。外に物欲しげな人間が見ているのを、振り返つてもみずに、面白げに飲んだり食つたりしやあがる。おれは癩^{てんかん}癩病^{かんびょう}みもやってみた。口にシャボンを一切入れて、唇^{くちびる}から泡を吹くのだ。ところが真に受ける奴は一人も無い。馬鹿にして笑つてけつかる。それにいつでも生憎^{あいにく}手近に巡查がいて、おれの頸^{くび}を攫^{つか}んで引つ立てて行きやあがつた。それから盲もやってみた。する事の無い職人の真似もしてみた。皆駄目だ。も一つ足なしになつて尻でいざると云うのがあるが、爺いさん、あれはおめえやらないがいいぜ。第一道具がいる。それに馬鹿に骨が折れて、脚が引つ吊つて来る。まあ、やつぱり手を出して一文貰うか、パンでも貰うかするんだなあ。おれはこのごろ時たま一本腕をやる。きょうなんぞもやったのだ。随分骨が折れて、それほどの役には立たねえ。きまつて出ている場所

と、きまってくれるお得意とがなけりやあ、この商売は駄目だ。どうせ貧乏人は皆くたばるのだ。皆そう云つていらあ。ひどい奴等だよ、金持と云う奴等は。」

「なぜぬすつとをしない。」爺いさんが荒々しい声で云つた。

この詞は一本腕の癪に障つた。^{こことば}「なに。ぬすつとだ。口で言うのは造倣^{ぞうさ}はないや。だが何を盗むのだ。誰の物を盗むのだ。盗むにはいろいろ道具もいるし、それに折も見計わなくちやならない。修行しなくちや出来ない商売だ。そればかりじゃないや。第一おれには不気味で出来ねえ。実は小さい時おれに盗みを教え込もうとした奴があつたのだ。だが、どうも不気味だよ。そうは云うものの、おめえ何か旨い為事^{しごと}があるのなら、おれだつて一口乗らねえにも限らねえ。やさしい為事^{しごと}だなあ。ちよいとしやがめば、ちよいと手に攫^{つか}めると云う為事で、あぶなげのないのでなくちや厭だ。そう云う旨い為事^{しごと}があるのかい。福の神の髻^{たぶさ}を攫^{つか}んで放さないと云う為事だ。どうかすると、おめえそんなのを一週間に一度ずつこつそりやるのかも知れねえが。」一本腕はこう云つて、顔をくしゃくしゃにして笑つた。

爺いさんは真面目に相手の顔を見返して、腰を屈めて近寄つた。そして囁^{ささや}いた。「おれは盗んだのだ。何百万と云う貨物^{しろもの}を盗んだ。おれはミリオネエルだ。そのくせかつえ死

なくてはならないのだ。」

一本腕は目を大きく睜^{みは}つた。そして大声を出して笑った。「ミリオネエルだ。あの、おめえがか。して見ると、珍らしいミリオネエルの変物だなあ。まあ、いいから来て寝ろ。おれのを半分分けてやる。ぴったり食つ附いて寝ると、お互に暖かでいい。ミリオネエルはよく出来たな。」

爺いさんは一本腕の臂^{ひじ}を攫^ひんだ。「まあ、黙って聞け。おれがおぬしに見せてやる。おれの宝物を見せるのだ。世界に類の無い宝物だ。」

一本腕は爺いさんの手を振り放して一歩退いた。「途方もねえ。氣違じゃねえかしら。」
爺いさんはそれには構わずに、靴をぬぎはじめた。右の足には黄革の半靴を穿^はいている。左の足には磨り切れた、控鈕^{ボタン}留の漆塗の長靴を穿^はいている。その左の方を脱いで、冷たいのも感ぜぬらしく、素足を石畳の上に載せた。それから靴の中底を引き出した。それから靴の踵^{かかと}に填^うめてある、きたない綿を引き出した。綿には何やらくるのである。それを左の手に持つて、爺いさんは靴を穿いた。そして身を起した。

「見ろよ」と云いながら、爺いさんは棒立ちに立って、右の手を外套の隠しに入れて、左の手を高くさし伸べた。

一本腕はあつけに取られて見ている。

爺いさんは左の手を開いた。指の間に小さい物を挟んでいる。不思議にも、その小さい物が、この闇夜に漏れて来る一切の光明を、ことごとく吸収して、またことごとく反射するようである。

爺いさんは云った。「なんだか知っているかい。これは青金剛石ダイヤモンドと云う物だ。世界に二つと無い物で、もう盗まれてから大ぶの年が立つ。それを盗んだのはおれだ。世界中捜しても知れない。おれが持っている。おれが盗んだのだ。なんでもふいと盗んだのだ。その時の事はもう精しくくわは知っていない。忘れてしまった。とにかくその青金剛石はおれが持っている。世界に二つとない真正正銘の青金剛石だ。世界中捜しても見附からないはずだ。乞食の靴の中に這入っている。誰にだって分からなからう。誰にだってなあ。ははは。何百万と云う貨物しろものが靴の中にあるのだ。」

一本腕は無意識に手をさし伸べて、爺いさんの左の手に飛び附こうとした。

「手を引つ込めろ。」爺いさんはこう云って、一步退いた。そして左の手を背後うしろへ引いて、右の手を隠しから出した。きらきらと光る小刀を持っていたのである。裸刃はだかみで。「手を引つ込めぬと、命が無いぞ。そこで今云ったとおり、おれが盗んでいるのだ。おぬし手な

んぞを出して、どうしようと云うのだ。馬鹿奴^め。取って売るつもりか。売るにしても誰に売る。この宝は持つていて、かつえて死ぬより外^{ほか}無いのだ。」

「馬鹿げているじゃないか。小さく切らせればいい。そんな為事を知ったものがあるのだ。おれならそう云う奴をどうにかして搜し出す。もしおめえの云うような値打の物なら、二人で生涯どんな楽な暮らしでも出来るのだ。どれ、もう一遍おれに見せねえ。」

爺いさんは目を光らせた。「なに、おれの宝石を切るのだと。そんな事が出来るものか。それは誰にも出来ぬ。第一おれが不承知だ。こんな美しい物を。これはおれの物だ。誰にも指もささせぬ。おれが大事にしている。側に寄るな。寄るとあぶないぞ。」手には小刀が光っている。

爺いさんはまた二三歩退いた。そして手早く宝石を靴の中に入れて、靴を穿いた。それから一言も言わずに、その場を立ち去った。

一本腕は追い掛けて組み止めようとした。しかしふと気を換えて罷^やめた。そして爺いさんの後姿を見送っているうちに、気が落ち着いた。一本腕は肩を聳^{そび}かした。「馬鹿爺い奴^めどこへでも行きやあがれ。いずれ四文もしないガラス玉か何かだろう。あんな手品に乗って気を揉んだのは、馬鹿だった。」こう云って一本腕はいつもの穴にもぐり込んだ。

爺いさんは鼠色の影のようにその場を立ち去った。そして間もなく雪に全身を包まれて、外の寝所を捜しに往く。深い雪を踏む、静かなさぐり足が、足音は立てない。破れた靴の綻^{ほころ}びからは、雪が染み込む。

青空文庫情報

底本：「諸国物語（上）」ちくま文庫、筑摩書房

1991（平成3）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鷗外全集」岩波書店

1971（昭和46）年11月～1975（昭和50）年6月

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2007年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

橋の下

フレデリック・ブウテ Frederic Boutet

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 森鷗外訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>